

ルーブリックを活用した国語科授業

－中学生の主体的な学びを育むために－

M17EP001

浅川 学

1. 研究の目的と背景

(1) 研究の目的

本研究の目的は、中学校国語科の授業において、生徒の主体的な学びを育むために、ルーブリックを活用することの有効性を明らかにすることにある。

(2) 目的設定の背景

筆者は、中学校現場で「国語は、正解が分かりづらい。だからテスト勉強の仕方も分からないし、嫌。」という生徒の声を何回も聞いてきた。そして、問題に対する解答が、妥当かどうかを自分で判断できないことは、生徒の学習意欲低下につながっていると感じ、生徒が主体的に国語を学ぶためにはどうしたら良いか、これまでその手立てを模索してきた。

筆者が聞いてきた生徒の声は、先行研究によっても裏付けられている。国立国語研究所の島村（1999）は、小学生を対象にアンケートを行いその結果の分析から、国語嫌いの原因として大きなものの1つに「答えのはっきりしないこと」を指摘している。

なぜ、生徒は国語科においてこのような思いを抱いてしまうのであろうか。

筆者は国語科の授業で、「何を学ぶか」が生徒にとって十分に明らかになっていないことが原因の1つではないかと考えている。「何を学ぶか」が生徒にとって明らかになっていないために、授業を通して生徒は「何が身についたか」が自覚できない。それゆえ、学習の成果を実感しにくくなったり、授業で学んだことを意図的に活用できなくなったりしている。

さて、生徒の主体的な学びを育むためには、見通しと振り返りが重要であるとされている。

中教審答申（2016）は、主体的な学びの視点として、「学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しを持って粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。」と述べ、主体的な学びの実現に向け、見通しと振り返りの重要性を指摘している。

以上の背景を踏まえて、筆者は国語科の授業において、生徒が「何を学ぶか」見通しを持ちながら学習に取り組み、振り返りによって「何が身についたのか」が実感できれば、主体的な学びが実現するのではないかと考えた。そして、その手立てとしてルーブリックを活用することに着目した。

2. 研究方法

研究方法は以下の2点である。

- (1) 先行研究の分析もとに、主体的な学びを育むルーブリックの在り方について検討する。
- (2) (1)で検討したことをもとに、実習を行っている学校（山梨県内公立A中学校）において、ルーブリックを用いた授業を行い、生徒作品や事後アンケートから、その成果や課題を検討する。

3. 主体的な学びを育むルーブリック

(1) ルーブリックの効果と残された課題

ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表」（西岡・石井・田中，2015）である。

文部科学省（2016）は、ルーブリックの特

徴等を次のように整理している。

- ・ 目標に準拠した評価のための基準作りに資するものである。
- ・ パフォーマンス評価を通じて思考力、判断力、表現力等を評価することに適している。
- ・ 達成水準が明確化され、複数の評価者による評価の標準化がはかれる。
- ・ 教える側（評価者）と学習者（被評価者）の間で共有される。
- ・ 学習者の最終的な到達度だけでなく、現時点での到達度、伸びを測ることができる。

そして、ルーブリックは、指導と評価の一体化や、多面的・多角的な学習評価の実現（中央教育審議会、2016）の必要性が高まる中、その手だての1つとして近年実践が積み上げられてきている。

赤沢（2015）は、ルーブリックを教師と子どもが共有し、子どもが自分自身を評価したり（自己評価）、友達と評価しあったり（相互評価）することで、子どもは自らの学習を客観的に捉える能力（メタ認知能力）や学習意欲を高めたり、学習内容に対するより深い理解をもつことができると指摘する。

教師と生徒がルーブリックを共有し、生徒が自己評価や相互評価を行うためには、授業で使うルーブリックが子どもたちに使いやすいツールでなければならないと考える。

しかし、先行研究の中学校国語科におけるルーブリックを検討すると、子どもが自己評価や相互評価をするために使いやすいかという観点から課題点も残されている。筆者が考える課題は、以下の2点である。

1つ目は、この単元で身に付けたい力がはっきりしないことである。単元を構成するにあたっては、単元目標の実現のため、指導内容を重点化することが求められている。しかし、課題があるルーブリックでは、単元目標とルーブリックの関連が図られず、レポートやスピーチなどの学習活動を網羅的に評価するものになってしまっている。このようなル

ーブリックでは、生徒はこれからの授業で、何を学ぶかが曖昧となり、見通しをもつことが難しくなってしまうと考える。

2つ目は、パフォーマンスの特徴を記した記述語が、子どもにイメージしづらいことである。レベルの違いが「説得力が高い」「工夫がみられる」などの表現によって分かれていて、どのようになっていけば「説得力が高い」のか「工夫がみられる」のか、子どもが具体的な姿をイメージできないものがある。このようなルーブリックでは、「何が身についたのか」子どもが自覚できないので、自己評価や相互評価することが難しくなってしまう。

授業実践にあたっては、このような2つの課題を解決するようなルーブリックを作成しようと考えた。

（2）評価規準と達成基準の設定

『学習指導要領解説』や国立総合研究所『評価規準の作成、評価方法の工夫改善のための参考資料（中学校）』を参考に、単元目標を設定し、それを実現するための評価規準を設定した。そして、授業でできた作品が、どのようになっていけば評価規準を達成したといえるかをイメージし、達成基準を設定した。達成基準は「A：十分満足できる」、「B：おおむね満足できる」、「C：努力を要する」の3段階で示すことにした。評価規準を達成している典型的な状態をBとし、生徒の状況も考慮に入れながら、それより上位の姿をA、Bに達していない姿をCに設定することにした。

4. ルーブリックを活用した授業

（1）授業実践の概要

- ①対象 山梨県内公立 A 中学校
- ②実習期間 5月～11月（週1回）
- ③授業実践
 - 1）対象 第3学年 1学級（30名）
 - 2）実践期間 2017年10月31日
から11月7日

（2）実践単位について

①単元名 未来の私に、これからの読書生活を提言しよう

(光村図書3年 未来の私にお薦めの本
—読書生活をデザインしよう)

②単元目標

- ・自分のこれまでの読書生活を振り返り、未来の自分にこれからの読書生活を提言する文章を書こうとしている。【関心・意欲・態度】
- ・これまでの読書生活を振り返り、これからの読書生活に対して意見をもつことができる。【C読むことーオ】
- ・学年別漢字配当表に示されている漢字について、文や文章の中で使い慣れることができる。【伝国(ウ(イ))】

③言語活動について

「C読むこと」の読書に関する単元である。単元目標の実現のため、「今までの読書活動を振り返り、これからの私に今後の読書活動をどのようにしたらよいかを提言として書き表すこと」を言語活動として設定した。

まず、今までの読書生活を振り返る。中学校生活で読んだブックリストを作成し、これまでの読書生活の傾向を分析し、気が付いたことをまとめていく。次に、これからの読書生活について意見をもつ。読書生活の振り返りを踏まえ、今まで読んだことのない分野の本を読んだり、自身の夢や進路に応じて、挑戦したい本を選んだりしながら、今後の読書生活について考えていく。

最後に、それらを提言として文章にまとめる。提言として書くのは、課題を自分事として捉え、学習への動機づけを高める手立てである。「これからの自分」という相手を想定して文章を書かせることによって、課題が生徒の内実に迫るものになると期待した。

④単元の指導計画

4時間の単元の指導を次のように計画し、実践を行った。(表1)

そして、生徒に使いやすいループリックを目指し、作成の工夫と活用の工夫を行った。

表1 単元の指導計画

次	時	主な学習
1	1	<ul style="list-style-type: none"> ・学習に対して見通しをもつ。 ・中学校生活でこれまで読んできた本を挙げながら、これまでの読書生活に対して自分の考えをもつ。 ・これまでの読書生活をふまえて、これからの読書生活に対して、自分の考えをもつ。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ・ループリックについて理解する。 ・教員が作成したモデル文を、ループリックを用いて評価しながら、ループリックの文言を理解する。 ・ループリックをふまえて、これまで読書活動やこれからの読書活動に対する考えを深める。
2	3	<ul style="list-style-type: none"> ・提案する文章を書く。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ・書いた文章を班で交流し、それぞれの作品の良いところを伝え合う。

4. ループリック作成の工夫

授業実践をするにあたり、提言の文章を評価するループリック(表2)を作成した。

表2 作成したループリック

「未来の私に、これからの読書生活を提言しよう」
ループリック

	読書に対する ^① 考えの形成 ^②	読書に対する ^③ 考えの形成 ^④	言葉のきまり ^⑤	
評価規準	・今までの読書生活の振り返り、自身の読書生活について考えをもっている。	・読書生活の振り返りをふまえて、これからの読書生活に対して考えをもっている。	・相手に自分の伝えたいことが伝わるよう、習った漢字を多用したり、適切な漢字を多用したりしながら文章を書いている。	
達成基準	A	・これまでの読書生活を振り返り、今までの本の傾向や読み方について分析して意見を述べておくとともに、その根拠を自身の生活の中から見出している。	・これまでの読書生活をふまえて、これから読むべき分野の本を考え、今後の読書生活の方向性について意見を述べている。	・文にねじれがなく、句読点の打ち方も適切である。また、小学校で学習した漢字及び常用漢字表に載っている漢字を使用した文章が書けている。
	B	・自分の読書生活を振り返り、今までの本の傾向や読み方について分析して、意見を述べている。	・これまでの読書生活をふまえて、これから読むべき分野の本を考え、今後の読書生活の方向性について意見を述べている。	・ねじれがある文も少なく、適切に句読点もつけられている。また、小学校で学習した漢字のほとんどを使用した文章が書けている。
	C	・これまで読んだ書名を挙げるのみで、これまでの読書生活の傾向を分析できていない。	・これからの読書生活について意見が書かれていない。これまでの読書生活の分析と、今後の読書生活への意見に関連がない。	・ねじれがある文が多く、必要ところで句読点が使われていない。また、小学校で学習した漢字がほとんど使用されていない。

出所：筆者作成

先行研究の残された課題をふまえて、生徒に使いやすいループリックを目指し2つの工夫を行った。

1つ目は、評価項目を焦点化することである。生徒に「何を学ぶか」が明確になるように、単元目標の実現のために評価項目を焦点

化した。単元目標の【関心・意欲・態度】の内容は、提言の文章からは見とることができな
いと考え、ルーブリックの評価項目から除外した。そして、授業中の生徒観察にて評価
することとした。

単元目標【C読むこと一オ】「これまでの読書生活を振り返り、これからの読書生活に対して意見をもつことができる。」を達成するためには、ア「これまでの読書生活」と、イ「これからの読書生活」、それぞれに対して考えをもつことが必要であると考えた。したがって、評価規準及び達成基準はア、イそれぞれに設定しなければ単元目標の達成の度合いは見とれないと考えた。そのため、アを「読書に対する考えの形成①」。イを「読書に対する考えの形成②」として、それぞれ別の評価項目として設定した。

工夫の2つ目は、達成基準の文言の具体化である。提言の文章で評価規準を達成している姿をイメージして、達成基準を具体的に設定した。「読書に対する考えの形成①②」では、Bは評価規準をもとに「意見を述べている」とした。Bの記述に根拠を挙げて意見を述べることを付け足しAを設定した。

文言は、なるべく子どもが「何が身についたか」が分かるよう、具体的かつ平易な表現を使用するようにした。

5. ルーブリック活用の工夫

作成したルーブリックを活用して授業を行った。1時間目に「中学校生活で読んだ本のブックリスト」の作成を通して、これまでの読書生活を振り返り、これからの読書生活に対する考えを生徒にもたせた。2時間目はまず、ルーブリック(表2)を提示して、提言の書き方を指導した。次に、そのルーブリックをもとに読書生活に対する考えを深めさせた。この時間は、研究授業として位置づけ、実習校の先生方に参観してもらおうとともに、授業後、参観された先生方と検討会を行った。

3時間目に、提言の文章を書かせ、4時間目に、提言の文章を読み合い、友達の提言の良いところを伝え合う活動を設定した。

以下、ルーブリックを効果的に活用するための工夫を行った2時間目と4時間目について具体的に記していく。

(1) 2時間目の授業

①モデル文を評価する活動

ルーブリックを効果的に活用するための工夫として、教師が用意したモデル文を生徒がルーブリックで評価する活動を活動を行った。この活動によって次の2つの効果を期待した。

1つ目は、生徒にルーブリックの達成基準の理解を促すことである。モデル文をAからCで評価するためには、ルーブリックの達成基準をそれぞれ読み、理解する必要がある。そうすることでA、B、Cそれぞれの共通点や違いに気づき、より高次に向かうためには、何が必要かを考えながら学習を進められるようになると考えた。また、4時間目で相互評価を行うことを計画しているので、達成基準を理解し、どのような提言を書けば、どのように評価することが共通理解できていれば、相互評価の効果もより高まると考えた。

2つ目は、生徒に学習課題への見通しをもたせることである。モデル文を実際に評価することを通して、どのような提言を書けば、達成基準が満たされるのかを具体的にイメージさせられると考えた。目指す提言の姿が明らかになることで学習活動に見通しがもて、生徒が提言の文章を書くことに取り組みやすくなることを期待した。

②授業の様子と生徒の反応

生徒はルーブリックを使用することが初めてで、ルーブリックという言葉も聞いたことがない。ルーブリックを使用することを伝えた時、不安そうな顔をする子生徒が多かった。

ルーブリックについて説明し、教員が用意したモデル文(資料1)を、ルーブリックのそれぞれの観点でAからCで評価させた。

単元の授業が始まっているので使用するループリックの大きな変更は子どもを混乱させると考え、それ以外のものは次回実践の課題として、今回は見送ることとした。

(2) 4時間目の授業

① 友達の良い所を伝える活動

ループリックを効果的に活用するための工夫として、4時間目に書いた提言の文章を読み合い、友達の文章の良いところを伝える活動を行った。友達からのコメントで自分の学習の成果を改めて実感するとともに、友達の優れた表現から学び、さらに次の学びにつなげることをねらいとしてこの活動を設定した。ループリックという共通の指標を用いて相互評価することで、この単元で何を学んだかが焦点化され、学習効果の実感が促されることを期待した。

② 授業の様子と生徒の反応

まず、文章を書いた自分を振り返り、「一番工夫したところ・がんばったところ」「大変だったところ・不安なところ」をワークシートに書かせた。

次に、班での活動を行わせた。生徒はワークシートの記述とともに文章を読み、ループリックを使用しながら、友達の文章の良いところを付箋に書き出した。そして、それを友達のワークシートに張り付けていった。

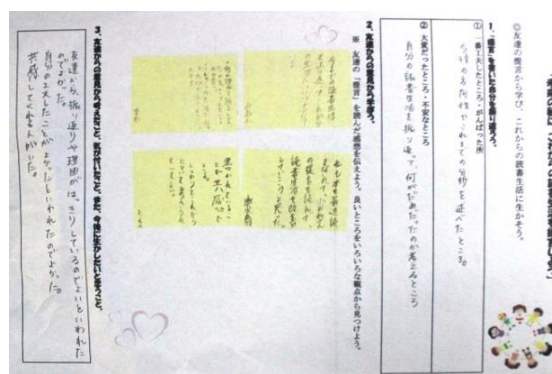
生徒は、自分のところに返ってきたワークシートに貼られた友達のコメントを熱心に読んでいた。友達のコメントから学習の成果を実感しているように感じた。

ワークシートに授業について考えたことを記入させ、ワークシートを完成させて提出させた。(資料2)

ワークシートの記述を見ると、「自分の工夫したことが認められてうれしかった」「読書生活の振り返りがうまくできていると言われてうれしかった」など、友達のコメントによって学習成果の実感が深まったものが多くあっ

た。また、「もう少しこれからの読書生活について書けばよかった。」「自分の文章は説明が足りない」など友達の文章と自分の文章を読み比べることで課題を見つけているものもあった。そして、「みんなは自分が思っているより、本を読んでいることが分かった」「〇さんは、新しいジャンルの本を気軽に読んでいきたいと書いていたので、自分も小説に興味をもてるように気軽に読み始めてみたい。」など、友達の提言から自身の読書生活をさらに考えるものもあった。

資料2 完成したワークシート



註：付箋には、友達から様々なコメントが寄せられた。この生徒は、付箋を読み、「自分が工夫したことが良かったと言われうれしかった。」などと記述し、学習の成果が実感されたことが見て取れた。

6. 結果

(1) 提言の文章の教員による評価

生徒が書いた文章を、ループリックに基づき教員が評価した。(表4)

表4 提言の文章の教員による評価

	読書にたいする考えの形成①	読書への意見の形成②	言葉のきまり
評価規準	・今までの読書生活の振り返り・自身の読書生活について考えをもつことができる。	・読書生活の振り返りをふまえ、これからの読書生活に対して考えをもつことができる。	・相手に自分の伝えたいことが伝わるよう、適切な表現で文章を書くことができる。
A	70.0%(21人)	20.0% (6人)	26.7% (8人)
B	26.7%(8人)	66.7% (20人)	70.0% (21人)
C	3.3%(1人)	13.3% (4人)	3.3% (1人)

ほとんどの生徒がどの評価項目でもB以上

を達成していた。使用したルーブリックは、評価規準を達成した典型的な姿をBと設定したので、単元目標をほとんどの生徒が達成したことが見とれた。

しかし、モデル文を評価したときに意見が割れた「読書への意見の形成②」は、A評価より、B評価が多くなった。ルーブリックの文言の理解にクラス内で差が生じたためだと考える。もう少し、AとBの達成基準の違いを詳しく指導すべきだったと感じる。

(2) 事後アンケート

授業後に選択式と自由記述を交えた事後アンケートを行った。アンケートによって、今回作成したルーブリックによって主体的な学びが育まれたかどうかを検討することが目的である。

①アンケート作成にあたって

中央教育審議会(2016)における、主体的な学びの視点は、「学ぶことに興味や関心を持ち」、「見通しを持って粘り強く取り組み」、「自己の学習活動を振り返って次につなげる」という3つの要素に分けられる。アンケート質問項目の選定にあたっては、それらの要素の実現を見とるための具体的な質問を考えた。

(表5)

表5 アンケートの質問項目と部分の対応

	質問項目
興味関心	あなたは今回の学習に積極的に取り組みましたか。
	ルーブリックは、学習の意欲を高めることに役立つと思いますか。
見通し	ルーブリックの、より高い段階を目指して「提言」を書くことに取り組みましたか。
	ルーブリックは、今回の授業で身につける力をはっきりさせるのに役立ちましたか。
	ルーブリックによって、「提言」の文章は書きやすくなりましたか。
振り返り	あなたは今回の学習で、国語の「読書」に関する力が高まったと思いますか。
	自分が書いた「提言」の良さを見つけるのに、ルーブリックは役立ちましたか。
	友達が書いた「提言」の良さを見つけるのに、ルーブリックは役立ちましたか。

友達が書いた「提言」の課題を見つけるのに、ルーブリックは役立ちましたか。

②授業後アンケート(選択式)の結果

授業後アンケート(選択式)の結果(図1)をみると、どの質問項目でも肯定的な意見が多い。特に生徒がルーブリックの効果を実感するのが、振り返りに関わる項目の、自分や友達が書いた文章の良さや課題を見つけることであった。

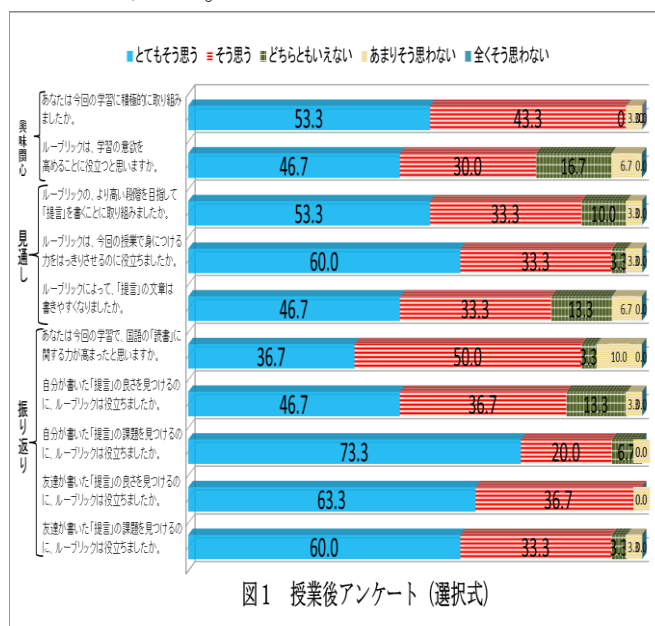


図1 授業後アンケート(選択式)

③授業後アンケート(自由記述)の結果

授業後アンケート(自由記述)は、「今回の授業やルーブリックについて、意見を自由に書いてください。」と質問し、30人のクラスで30の回答を得た。「特になし」という記述が1人あったが、その他のものを分類すると4つの項目に分けられた。(資料3)

資料3 授業後アンケート(自由記述)結果

授業後アンケート(自由記述欄)結果	
→「今回の授業やルーブリックについて、意見を自由に書いてください。」	→回答数 30(学級30人中)
→特になし (1人)	
1 授業や学習内容に対する興味や関心が高まる(7人)	・読書に対する関心が深まった。これからの読書生活を工夫してみたいと感じた。
2 「何を学ぶか」見通しがもて、取り組みやすくなる(6人)	・ルーブリックは、評価の基準が明確になり、分かりやすかった。 ・モデル文をルーブリックで評価する授業があり、書きやすくなった。
3 授業を振り返り、「何が身についたか」成果や課題が実感できる。(12人)	・ルーブリックという分かりやすい基準があることで、自分だけでなく友人のことも批評しやすかった。
4 ルーブリックを活用する授業の難しさ(4人)	・むずかしかった。 ・ルーブリックによって条件が決まっているので、それを満たせるように書くのが大変でした。

多くが肯定的な回答であったが、ルーブリックを活用する授業の難しさを指摘するものがあった。

7. 成果と課題

(1) 成果

本稿では、中学校国語科の授業において、生徒の主体的な学びを育むために、生徒に使いやすいルーブリックという観点から、ルーブリックを作成し、授業において効果的な活用方法を検討した。

その結果、以下に挙げる成果が見られた。

第1に、単元目標の実現に向け、評価項目の焦点化と達成基準の具体化を図ったルーブリックは、単元目標の実現に効果があることが確認できた。提言の文章の教員による評価(表4)で、どの評価項目もB以上が多いことから、この成果が裏付けられている。

第2に、ルーブリックを共通理解することによって、生徒は学習に対して見通しを持ちやすくなり、学習課題に取り組みやすくなることも分かった。活用の工夫としてモデル文を評価する活動を行ったが、授業後アンケート(自由記述)(資料3)には、「モデル文をルーブリックで評価する活動があり書きやすくなった。」との記述があり、生徒も活動の効果を実感していたことが見てとれた。

第3に、ルーブリックを使用し、生徒が自己評価や相互評価をすることは、学習の成果を実感することに効果的であることが認められた。授業後アンケート(選択式)(図1)の結果から、特に生徒がルーブリックの効果を実感するのが、振り返りに関わる項目の、自分や友達を書いた文章の良さや課題を見つけることにあった。ルーブリックという共通の指標があることで、友達の作品から学び、学習の成果が実感されたり、次につなげたりすることができたのではないかと考える。

以上のことから、ルーブリックを活用することは、主体的な学びを実現する一助となる

と考えられる。

(2) 課題

ルーブリックを活用する授業の難しさが生徒や教員から指摘された。その課題を解決するため手だてとして2つのことが考えられる。

1つ目は、さらに生徒に使いやすいルーブリックを作成していくことである。そのためには、今後は、2時間目の授業後開かれた授業検討会で出された「視覚的に訴える」、「達成基準は箇条書きにして提示する」、「なるべく生徒の日常生活で馴染みがある言葉で記述する」という改善策を取り入れたルーブリックを作成し、その効果を検討していきたい。

2つ目は、ルーブリックを活用した授業実践を積み上げ、生徒に慣れさせることである。今回生徒はルーブリックを使用することが初めてであった。ルーブリックに慣れることで、生徒の負担感も減らすことができると考えている。

以上をふまえながら、今後も生徒に使いやすいルーブリックの作成を目指し、実践を積み重ねていきたい。

引用文献

- ・赤沢真世 (2015) 「何のための評価ですか」、西岡加名子・石井英真・田中耕治編『新しい教育評価入門一人を育てる評価のために』、有斐閣、pp. 17-18.
- ・島村直己 (1999) 「子どもの言語問題—国語嫌いについて—」、『社会言語科学第2巻第1号』、pp. 15-24.
- ・中央教育審議会 (2016) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」
- ・西岡加名子・石井英真・田中耕治編 (2015) 『新しい教育評価入門一人を育てる評価のために』、有斐閣、p. 45.
- ・文部科学省 (2016) 平成28年1月18日教育課程部会総則・評価特別部会(第4回)資料6-2 学習評価に関する資料、p. 30.